

特集

講演録

信長・秀吉を支えた 岐阜の武将たち



今年は、1567年に信長公が岐阜に入城し、岐阜と命名してから450年という節目の年です。現在岐阜市では、「信長公ゆかりのまち・岐阜市」を都市ブランドとして発信すべくさまざまな周年事業が実施されています。

そのなかで、本誌では7月号より信長公にまつわる講演内容を特集いたしております。今月号では去る7月3日に開催しました議員懇話会において、岐阜市教育委員会社会教育課長 内堀信雄 氏をお招きし「信長・秀吉を支えた岐阜の武将たち」と題してご講演いただきました内容をご紹介します。

信長のみならず、信長にまつわる「岐阜の武将たち」に焦点を当てたこの講演録を通して、今までとは少し違った視点で岐阜の歴史物語に想いを馳せていただければと思います。

1 はじめに

2年前の平成27年4月、岐阜市の提案した「信長公のおもてなし」が息づく戦国城下町・岐阜」が「日本遺産」の第一号に認定されました。「日本遺産」は地域の歴史的魅力や特色をつうじて日本の文化・伝統を語る魅力溢れるストーリーを文化庁が認定するもので、地域に点在する有形・無形の様々な文化財群を面として総合的に整備・活用し国内だけでなく海外へも戦略的に発信していくことにより観光振興や地域の活性化を図ることを目的としています。

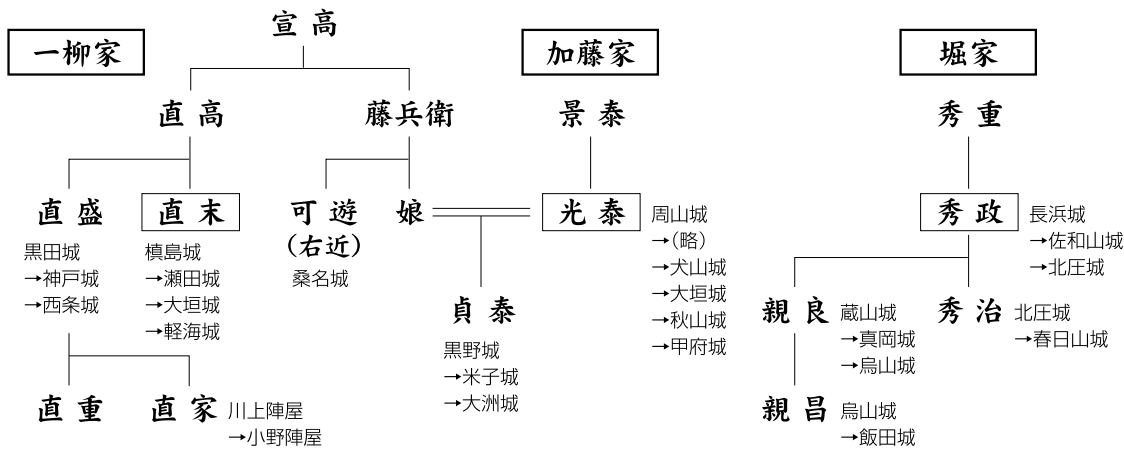
これを受けて、昨年7月に「日本遺産サミット in 岐阜」が開かれました。今年も7月に「日本遺産サミット」が京都で開かれ、私も参



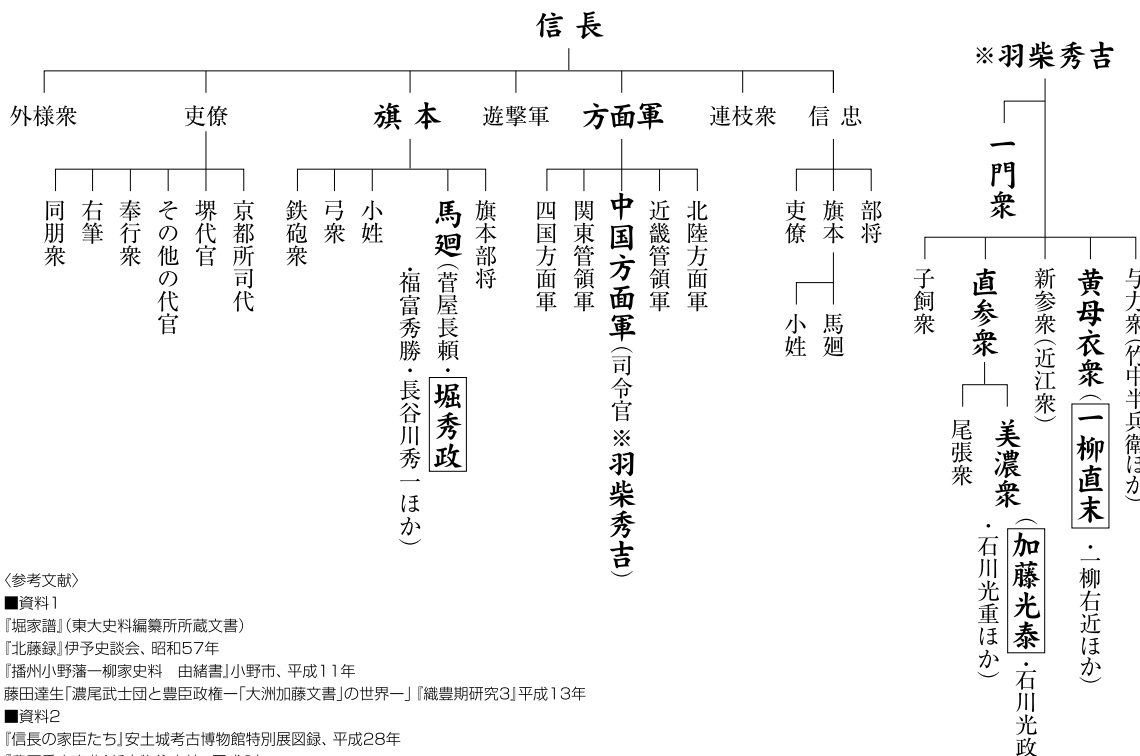
岐阜市教育委員会社会教育課長
講師
内堀信雄 氏

PROFILE (うちぼりのぶお)
昭和34年 栃木県宇都宮市に生まれる。
昭和61年 名古屋大学大学院文学研究科(考古学)卒業。
岐阜市教育委員会にて信長公居館跡発掘調査、長良川難関習俗調査などを担当。現在、岐阜市教育委員会社会教育課長
主な著書
『守護所と戦国城下町』高志書院、平成18年
『小牧山城・岐阜城・安土城』『中世城館の考古学』高志書院、平成26年

資料1 関連略系図



資料2 信長家臣団(本能寺の変直前)及び秀吉家臣団(長浜城時代)



〈参考文献〉
■資料1
『堀家譜』(東大史料編纂所蔵文書)
『北藤録』伊予史談会、昭和57年
『播州小野藩一柳家史料 由緒書』小野市、平成11年
藤田達生『濃尾武士団と豊臣政権—「大洲加藤文書」の世界—』『織豊期研究3』平成13年
■資料2
『信長の家臣たち』安土城考古博物館特別展図録、平成28年
『豊臣秀吉事典』新人物往來社、平成2年

作成／内堀信雄

2 三人の武将

信長という人物は現代風に表現すると、ワンマンな「カリスマ経営者」だったのではないかと思います。一代で「織田カンパニー」を立ち上げて急成長、日本一になる直前に急死してしまいます。そこからの後継者争いを勝ち抜き、わが国最大の企業・トヨタミ総合商社を作ったのが豊臣秀吉といったイメージです。

本日の講演は「信長・秀吉を支えた岐阜の武将たち」と題しました。信長・秀吉という経営者・社長を支えた岐阜市出身の三人の社員(武将たち)について、彼らが加

名にまで出世していく汗と涙の物語をお話したいと思います。

三人の武将とは、堀秀政・加藤光泰・一柳直末です。最終的にどうなったかですが、現代風にいいますと、堀秀政は福井県支社長、越前一国18万石の大名になりました。加藤光泰はもつとすぐくて、山梨県、甲府一国24万石の支社長。そして一柳直末は、少し早く亡くなつてしまひ西美濃支店長ぐらい軽海城主6万石で終わってしまひますが、秀吉に一番頼りにされた人物の一人だと伝わっています。

この三武将について調べてみて、こんなにすごい人たちが岐阜市で生まれ育ったというのに改めて驚きました。彼らの力があつたから信長公の天下布武、それを受け継いだ秀吉の全国統一が達成されたのではないかと認識しました。彼らが亡くなった後も、子孫は江戸時代を通じて各地で藩主として代々存続し、明治維新まで残っています。

岐阜市というと斎藤道三だろうといわれることもあります。道三は美濃の国盗りに成功し、息子・孫の三代にわたる稲葉山城主としての斎藤の時代を築き上げました。三武将の先祖が斎藤氏の時代に「四天王」と呼ばれていたことを一

柳家「由緒書」で最近知りました。四天王だから四つの家なのですが、もう一家は谷氏でどうも岐阜市出身ではないようです。

四天王の家は農民ですが、武力を持った地域の有力者「土豪」でした。当時、美濃の国はとても治安が悪く盗賊が横行していました。四天王はそれを取り締まるために斎藤の殿様に雇われたリーダーだったのです。堀・加藤・一柳の三家は、この後信長・秀吉に仕えて出世し、有力な武将になっていきます。

堀秀政(ほりひでまさ)

まず堀秀政の話をします。彼は岐阜市西部出身で、信長が岐阜に



堀秀政生誕之地

入城する2年前から仕えていました。美貌の持ち主で頭の回転が速く、信長にとても可愛がられ、側近(馬廻)に取り立てられていました。実際に合戦で手柄を立てるというよりは、信長の意思を伝える秘書課の職員みたいな役割を果たしていました。信長が本能寺の変で亡くなる直前には、滋賀県長浜2万5千石を与えられましたが、これは近江(滋賀県)全体の支配を任せるための準備だったのではないかと説もあります。

1582年、本能寺の変で信長が亡くなると各地が大混乱に陥りますが、彼は状況判断が抜群ですぐに秀吉を支持し、その配下につきます。そして、1585年には越前(福井県)の18万石を与えられ、北庄城の城主になります。その城下町を作った時のことですが、こんなエピソードがあります。「城下町に秀政の政治の悪口を書いた立札が建てられた。秀政はこれをじっくり読んでから袴を着けて手を洗い三度にわたり、うやうやしくこの札をいただいた。そして『これは天が私に与えてくださったものだと思う。この札は家宝である』と言って、立派な袋に入れて箱に納め、直ちに政を改めた。この後世間の人はみな堀秀政を名

人左衛門督(めいじんさえもんのかみ)と呼ぶようになった。」

このように、顔もいいし頭もいい。しかも人望も厚いというすごく良く出来た人でしたが、唯一の弱点は健康でした。秀吉のもとで順調に出世していきますが、1590年秀吉が小田原の後北条氏を攻めたときにその陣中で病死してしまひます(享年38歳)。一説によると、秀吉は小田原攻めの後に関東後北条氏の領国8か国を秀政に与える予定でしたが、亡くなってしまったので、徳川家康を置いたとのこと。この伝承自体は信じがたいが、数か国にわたる大名になったのは確実だっただろうという研究者もいます。秀政が亡くなった後は息子秀治が後を継ぎます。その子孫は長野県飯田市の藩主になり、明治維新まで続いています。

加藤光泰(かとうみつやす)

次に加藤光泰です。黒野城主加藤貞泰の父にあたります。光泰は岐阜市橋詰(今の端詰町付近)出身です。光泰の奥さんが一柳家出身で両家は親戚です。光泰は信長直臣でなく、信長家臣である秀吉の家臣になります。秀吉に仕えていたため、本能寺の変以後、秀吉と

ともに急速に出世します。

1585年に大垣城4万石を与えられました。しかし、その直後に光泰は失言によって秀吉に領地を没収されてしまひます。ほどなく許されて滋賀県の佐和山城主になって、石田三成が「光泰は秀吉の直轄地まで自分の領地にしようとしている」と悪口を言ったのが原因であるという説があります。

この頃は秀吉が日本中の大名の領地を配置転換しようとしていた時期でした。配置替えにあたっては各地で相当の反発が起る予想されました。それを防ぐため、直臣の加藤光泰でさえ間違いを起せば処分されるということをアピールするため「やらせ」で大垣城没収劇を演じたのではないかと考える研究者もいます。



加藤光泰画像[東京大学史料編纂所蔵模写]

1590年の小田原攻めも生き抜き、戦後山梨県・甲府24万石の大名になります。そして甲府城を築き始めます。しかし、まもなく朝鮮の役(文禄・慶長の役)に出兵、現地で病死してしまひます(享年57歳)。実は光泰の大栄転を妬んだ石田三成が毒殺したのだと江戸時代に加藤光泰の子孫が書いた『北藤録(ほくとうろく)』に記されています。

亡くなる直前に光泰が書いた遺言書が残されています。「息子(貞泰)は若年でとても(甲斐24万石)は勤まりません。お取り上げになつて、(秀吉様の)おそば近くへ召し仕えるようにお願いします。(お願いの品として)秀吉様へ珍しい茶道具を差し上げたいところですが、貧乏人なので持つておりません。かわりに金子50枚を進上し

ます」といった文面で、残される息子への思いが伝わってきます。

加藤光泰が亡くなった後、息子貞泰は岐阜市の黒野城4万石の城主になります。その後、貞泰は鳥取県の米子城に6万石で移り、最後は愛媛県の大洲城主になります。その後、子孫は江戸時代を通じて大洲藩主となり明治まで続きます。ちなみに今年は加藤貞泰が大洲に入城してちょうど400年となります。

一柳直末(いつやなぎなおすえ)

最後に一柳直末ですが、西別院の建っている場所で生まれました。信長が岐阜に來た後で秀吉に仕えています。勇猛果敢な武将だったようで、1573年、信長が浅井氏、朝倉氏を滅ぼしたとき、手柄のあつた武将7人が選ばれた黄母

衣衆の一人に任命されました。

その後も、秀吉の家臣として各地を転戦し手柄を立てました。秀吉は信長の命により姫路城を大改造しますが、直末は秀吉の直し方が気に入らないといつて自分流に勝手に設計を変えてしまったそうです。秀吉は激怒しますが、直末は「秀吉が作った設計では西国大名の笑いものになる。また有事の際、城が役に立たない」と言つてやめません。そこで弁明できなければ切腹させるという条件で問答を行った結果、直末の主張が認められたと伝わっています。設計変更した場所は「市助(直末の名前)曲輪」と呼ばれていましたが、江戸時代になってから一柳家の子孫が姫路城に行き「どこですか」と聞いたらもうわからなかったということです。

資料3 三武将関連地図



のを直末の弟の直盛が叱って自ら槍を振るい先頭に立って敵陣を切り崩したといひます。その後江戸時代になり、一柳直盛の子孫は兵庫県小野市（小野藩）の藩主になります。小野藩の殿様が参勤交代のときに岐阜市に来て、先祖にゆかりの人物の子孫から直接話を聞いたのが先ほどの「四天王」のエピソードで、一柳家『由緒書』に書いてあります。ちなみに直末が亡くなった山中城の近くの静岡県長泉町には首塚があるそうです。

3 三武将の出身地

1585年に大垣城主加藤光泰が失脚した後に大垣城主になります。その後、1589年には美濃の輕海城6万石の城主になりました。そして1590年。小田原攻めの最中に伊豆の山中城で激戦の末に戦死します（享年45歳）。秀吉はこの討死を聞いて「城は落ちても直末を討死させてはこの戦は秀吉の負けである」と言って嘆いたとき、一柳家の軍勢が浮足立つ

ました。一柳直末の出身地は今の西別院のあたりです。西別院は本門と裏門が県の文化財、経蔵が市の文化財になっていますが、「一柳直末公生家」という顕彰は全くしていません。これからの課題かなと思います。加藤光泰は端詰町出身ですから、岐阜市役所本庁舎と美江寺公園の間に生家があったようです。残念ながら全く面影はありません。

いつも何気なく歩いている市内の身近な場所です。信長・秀吉とともに日本の歴史に関わった武将たちが生まれた。しかも彼らは全国各地で大名になっていったということとは本当に驚きです。

4 町の成り立ち

最後に町の成り立ちについてひとこと。岐阜というと織田信長の城や館があつた金華山や長良川の周辺がずっと栄えていたようなイメージが強いと思いますが、奈良時代や平安時代には柳ヶ瀬付近（文化センター周辺）が町の中心でした。古代のお寺とか役所はこのあたりに建てられていました。一柳家や加藤家は昔からの町の近くに住んでいた有力者土豪だったことになりました。ちなみに室町時代後期あるいは戦国時代になって

川湊（川原町周辺）が栄え、少し経ってから斎藤道三の稲葉山城・井口城下町ができてくる、そこに今から450年前、信長が入城。さらに発展して今に至ります。

5 おわりに

以上信長・秀吉を支えた岐阜市出身の三人の武将についてご紹介してまいりました。岐阜市をアピールするとき、今まではどうしても信長中心になりがちでしたが、正室濃姫はもちろん信長にまつわる岐阜市出身の武将たちにも登場してもらふことで、より魅力的な信長と岐阜市の物語が描けるような気がします。彼らの子孫が藩主を勤めた土地なども是非、訪ねてみたいと思います。

追記…講演終了後の8月5日、「黒野城主加藤貞泰は岐阜市橋詰出身」という大ニュースが新聞に載りました。「黒野城と加藤貞泰公研究会」の方々の丹念な現地調査により高野山にある五輪塔の文字から解明したとのこと。講演で加藤光泰公と出身地橋詰を話題にしたばかりであり、強い感銘を受けました。光泰公・貞泰公もさぞかし喜ばれていることでしょう。